

先達に学び 業績を知る

～視覚障害先覚者の足跡～

監修 高橋 實

社会福祉法人
視覚障害者支援総合センター

先達に学び 業績を知る

～視覚障害先覚者の足跡～

発刊にあたって

社会福祉法人

視覚障害者支援総合センター

理事長 高橋 實

現在、視覚障害者支援総合センターが編集・発行しております月刊『視覚障害——その研究と情報』が、去る2009（平成21）年3月号をもって通巻250号を迎えました。前身である『新時代』の創刊が1963（昭和38）年4月でしたから、丸45年の歩みでした。創刊号は点字版のみで、遅れること1年後、第2号から墨字版も発行しました。その後、テープ版、フロッピー版、電子メール版と媒体を増やしながら、発行回数も年1回から複数回へ。2004（平成16）年4月からは月刊誌としてお届けしています。この春からは、以前より要望の多かったDAISY版の製作も開始し、少しでも皆さまのニーズに合った媒体で情報提供ができれば、と考えています。

5年前、それまで隔月刊であった『視覚障害』を月刊化するに際して、「何か新しいコーナーを」と思い立った中のひとつに、「先達に学び業績を知る」がありました。視覚障害という世界の中で苦悩しながらも、道を切り開いてこられた諸先輩方の姿勢・業績を皆さまと共に振り返り、噛みしめていくべく企画しました。「温故知新」という言葉は、いささか使い古された言い回しですが、改めて先人たちの歩みを学んでみますと、その行動やものの考え方は古さを感じさせず、全く新しい発見と驚きを与えてくれることの多さに気づかされ、この陳腐な言葉に込められた、その意味の普遍性に、大きく唸られるのです。

本書は『視覚障害』2004年4月号No.191からスタートした連載「先達に学び業績を知る」において紹介してきた50人の先達の偉大な事績や、その裏に垣間見える人となりを50音順で1冊にまとめたものです。視覚障害者に対する社会的理解が乏しかった時代に、力の限りを尽くされた先達の生き様を知ることは、現在進行形の問題解決への手がかりとなります。時代背景による違いこそあるでしょうが、今私たちの周りにある問題を、どう考え、どう解決していけばよいのか。そのヒントは、本書の中に溢れていると思います。また同時に、視覚に障害を持ちながらも様々な方面で活躍された先達の偉業に触れると、彼らを陰日向で支えた方々への畏敬の念を

持たせてくれます。支えとなって生きた方々に対しての思いは、そうした人生の肯定に繋がります。その広がりや、ときに1人の偉人よりも、大きな力を持つことも事実です。本書は読者ひとりひとりの中に「温故知新」の意味を投げかけてくれる可能性をもっています。

センターでは、文月会（日本盲人福祉研究会）時代の1980年代に出版した盲先覚者シリーズ全5巻（岩橋武夫・秋元梅吉・熊谷鉄太郎・中村京太郎・鳥居篤治郎）や『人と業績——盲先覚者の偉業をたずねて』などの伝記シリーズを発刊してきました（いずれも墨字）。今回、このシリーズの連載を続けていく中で心がけていますのは、現在のこと、近い過去のことを、流れゆく時代に委ねずに、将来へ繋いでいくことです。取り上げた方と近い関係の著者の方に執筆いただいた作品が多いのはそのためです。ですから本書は評価の定まった人物とその事績を蒐集した「伝記」と言うよりむしろ、未来志向の「人物伝」としてお読みいただいた方がよいのかも知れません。

お断りとして、先に「50人の先達」と述べてきましたが、2003（平成15）年11月号№188の「特集」において取り上げた、日本点字図書館創立者の本間一夫先生に関する一編について言及せねばなりません。この一編は、連載のうちではありませんが、「先達に学び業績を知る」というコーナーの誕生のきっかけとなったという経緯があり、本書に掲載しました。結果的に追悼記事となってしまったのですが、本書に収めた50人と、さらにその先の50人に光を当てた主とも言えます。番外的な作品ですが、本書の導入部に収めた意味を、あれこれとお考えくださりながら頁を手繰っていただければ幸いです。

最後になりましたが、本書の持つ社会的意義と役割をご理解いただき「年賀寄附金」のご助成をしてくださった郵便事業株式会社に対し、厚く御礼申し上げます。また、助成を受けたことで、本書を日本全国の視覚障害者情報提供施設や盲学校など200以上の関係機関および関係者にお送りさせていただける運びとなりました。念願でありました点字・墨字・DAISYの3媒体による、いわゆる「バリアフリー出版」が叶いましたことで、より多くの方が1人+50人の先達の人生に触れていただく機会が得られましたことを、心より嬉しく思っております。

2009年7月

目 次

発刊にあたって	i
文化の泉守った人 本間一夫先生との出会い —— 一読者・人生の後輩として ——	藤野 高明 1
障害者と共に歩む 青木優・道代夫妻	今駒 泰成 13
盲女性の自信と誇りを体現した慈母 粟津 キヨさん	輿水 辰春 20
熱く燃えて走り抜いた 安藤 嘉英先生	阿佐 光也 27
点字出版を足場に盲人福祉のフィールドを広げた 井口 淳さん	高橋 秀治 34
砂山 せつ子 キリストにとらえられ、 キリストに献げられた人生	阿佐 光也 41
江戸時代 盲人保護確立の立役者 伊豆 圓一	慎 英弘 48
我が人生に悔いはなし 詩吟一筋の伊藤 岳峯さん	松浦 実希 55
盲人にも無限の可能性——世盲協で活躍し、 社会職業リハビリテーションを導入した 岩橋 英行	木塚 泰弘 62
点字図書館を育て、ハンセン病患者に寄り添って半世紀 ——名古屋ライトハウス会長の岩山 光男さん	水谷 昌史 69
戦後における視覚障害教育の牽引役を全うされた 大川原 潔先生	香川 邦生 76
中途失明者教育に全力を注いだ 小川 光一郎氏	高橋 秀治 86
数学を教え視覚障害者に新たな可能性と勇気をもたらした 尾関 育三さん	長岡 英司 93

加瀬 三郎さん 折り紙外交と団体への貢献で、 村谷昌弘福祉賞を受賞	武藤 歌織	100
進学適性検査点字第1号 勝川 武氏	金森 なを	107
加藤 一郎 ある「カリスマ盲人」の肖像	法澤 奉典	114
障害者社会史研究の開拓者 加藤 康昭博士	高橋 智	122
金澤 明二先生に送る手紙	梅尾 朱美	130
連帯の精神で視覚障害者福祉の向上に努めた人 金成 甚五郎	新阜 義弘	137
文芸を通じて視覚障害者福祉の向上に努めた 木村 龍平さん	新阜 義弘	143
関西で盲女子教育に尽力した 越岡 ふみ	山口 規子	150
愛盲の精神で福祉の世界を走り抜けた 近藤 正秋さん	阿佐 博	156
「知る」ということを希求して止まない盲教育者 桜井 政太郎先生	佐々木 実	164
視覚障害者の新時代を啓いた 左近允 孝之進	増田 守男	170
95歳で現役 佐藤 親貴 ——芸の道ひとすじ 白菊のように	吉澤 昌江	176
岩手の盲聾教育の創始者 柴内 魁三	佐々木 実	183
点字と信仰と愛に生きた 下澤 仁先生	当山 啓	189
理教連の屋台骨だった通称“灸達” 鈴木 達司先生	長尾 榮一	196
晴盲一体の三療業資質向上を生涯目指した 関野 光雄先生	白畠 庸	202
理療科学化の大道を開いた 芹澤 勝助氏	長尾 榮一	210
風雪に耐えた人格 高橋 豊治先生	長尾 榮一	217

笑顔の奥に秘められた静かな闘志——竹内 勝美さん	大藪真知子	224
気負わず奢らずに専念した三療業		
——101歳の生涯を現役で通した 多田 彌太郎さん	佐々木 実	230
城造りと教材作りに邁進		
——今なお情熱を燃やし続ける 田辺 建雄さん	岩上 義則	237
開拓伝道で活躍した 玉田 敬次氏	阿佐 博	244
中途失明を乗り越え大学にて教鞭をとり続けた 田村 洋幸	愼 英弘	251
「自立した盲人であれ」と「食」情報を発信して20周年		
——会長に就任、すこやか食生活協会の堤 恒雄さん	武藤 歌織	258
戸井 美智子さんを訪ねて	竹田 恭子	265
火中の栗を拾い続けて79年		
——毅然として難局を切り開いた 直居 鉄さん	岩上 義則	273
大学進学から米国留学した 永井 昌彦	加藤 俊和	280
信念を貫き、爽やかに生きる 西岡 恒也先生	藤野 高明	287
「答えは自分で見つけるもの」 箏曲家として、俳人として、 趣味の人として、悠々自適の西崎 澤子さん		
	水谷 昌史	295
見えない駒に夢と魂を込め続けた 西本 馨六段	藤野 高明	302
視覚障害運動に半世紀		
——第1回村谷福祉賞の樋口 四郎さん	水谷 昌史	309
点字出版に情熱を燃やした 肥後 基一	阿佐 博	315
現代邦楽の先駆者 久本 玄智	吉澤 昌江	322
時代の先が見えていた		
松井 新二郎先生の先駆的な活動・業績	小林 一弘	329

現代邦楽の父 宮城 道雄	吉澤 昌江	337
箏の音が飛ぶ箏曲家 森 雄士	長尾 榮一	344
山田流箏曲の開祖 山田 斗養一 検校	長尾 榮一	350
与野 福三 —— 今も羽ばたき続ける静かな情熱	大藪真知子	357
著者一覧		364

文化の泉 守った人

ほんま かずお 本間 一夫先生との出会い —— 一読者・人生の後輩として ——

藤野 高明

2003年11月 No. 188 掲載

まえがき

2003年8月1日、日本点字図書館の生みの親であり、その事業の発展、充実に生涯を捧げられた本間一夫先生が心不全のため、亡くなられました。

その日の夜、高橋実さんからその知らせを受けた時、私は一瞬思考停止の状態に陥りました。本間先生についての一文の執筆をお引受けし、先生ご自身にもお目にかかり、そのご了解も得て筆を進めている最中のお別れでしたから。

7月半ば頃より病状が思わしくなく、図書館職員の面会も差し控えていると聞いていましたので、もしやという恐れは当然ありました。だから一方には、先生の命と競争するような気持ちと、他方にはきっと不死鳥のようにお元気になれることを期待する気持ちが相半ばし、とても複雑な思いで書いていました。人の出会い、時のめぐり合わせとは不思議なものです。「1年早ければ先生に読んでもらえたのに」と残念がってくださる方もありました。しかし、この度の原稿執筆にしても、もし、高橋実さんの推薦がなかったとしたら、6月26日、先生のご自宅であるように貴重で豊かな時間をもつこともなかったでしょう。

先生にお読みいただくつもりで書いたものを、そのまま編集部にお届けします。

高い志と、広い視野、抜群の行動力と恐るべき記憶力、常にロマンと若さを感じさせる発想の斬新さと感性のみずみずしさ、それにあの明るくや



さしい人柄、それは比類なき大きさと魅力をたたえた存在でした。

同時代に生き、私のはるか前方を、ゆっくりと歩いて「神の国」に召された偉大な先輩に敬愛の念を一層強くしています。

夢を語る本間先生

本間先生は、今年1月体調を崩され、一時期入院されましたが、5月末からは自宅で療養されていました。

私は、『視覚障害』の11月号に本間先生についての文章を書くことになったので、そのご了解を得るためと、お見舞いを兼ねて是非お会いしたいとお電話をさしあげ、上京の日も6月26日とお約束しました。その日は、滋賀県の「グループ ともしび」の古谷あや子さんにご一緒願うことにしました。古谷さんは音訳ボランティアとして、その明るく歯切れのいい朗読で、数多くのテープ図書を制作されており、本間先生とも親しくお付き合いのある方で、とてもいい手助けを受けることができました。

先生もこの日を楽しみにして下さっていた様子で、私宛の23日付けのお手紙にも、「あなたが、ぼくのことを書かれるのだと知ってホッとしています。3月25日、2度目の思いがけぬ入院で、1カ月ほどで退院はできたのだが、以後の経過が思わしくないのです。お書きくださるなら、本もありますし何とかなるでしょう。とにかく良かったです。古谷さんという人は大変熱心な人です。とにかくお待ちします」と書いてありました。

日点は何度も訪ねましたが、図書館の裏手にあるご自宅を訪問するのは初めてで、少し緊張していました。しかし、ご長男のお嫁さん、圭子さんの出迎えを受け応接間に通されると、いつに変わらぬあたたかい先生のお声にホッと肩の力が抜けました。

この秋、満88才になられるご高齢とご病気の時でもあり、30分程で辞去させていただこうと思っていたのですが、先生とご家族のご好意にあまえ2時間近い時間を過ごさせていただきました。

先生を知る人たちがよく口にすることですが、先生は「人が好き。点字が好き」。だから「人」と「点字」の話になると、つつい時間のたつのを忘れました。

先生は「ベッドの中の夢だけね」と言われながら、2つの夢を熱っぽく話されました。

1つは、視覚障害を持ちながら、福祉や教育の分野で力を尽くした我が先輩たちの写真、声、著述、業績などを、きちんと収集、保存し、社会に

啓発する記念館を創りたいということでした。

もう1つは、日本の点字が小さすぎて、特に中途視覚障害者には、なかなか取り組めないのではないか。これをアメリカ、ドイツ、ロシアなみの大きさにする方がいいのではないか。岐阜の藤野克己さん等もそのような考えで、すでに実用化を試みられており、期待している、とのお話でした。

先生はやがて体調が回復し、「一日に少しの時間でも図書館の方に出入れるといいと思っています。それにしても岩上館長はよくやってくれていますよ」と仕事への思いを語られていました。

高齢にもかかわらず、なお夢と意欲を持ちつづけられている先生に、私は「青年の気」を感じました。

先生は、私が少しでも書きやすいように、いろいろなお話をしてくださり、貴重な数冊の本も用意してくださっていました。

その場には、圭子さんが終始付き添われ、ごく自然にお世話されていました。私は、この人が1992年4月、先生が心臓動脈の、バイパス作りという大手術をされた時、「これから、もっともっとお世話しますから、早く元気になってください」と励まされた圭子さんだナと思うと、胸にこみ上げるものがありました。

真夏の点字図書館

初めて本間先生にお会いしたのは、1968年7月。先生は52才、私は29才でした。通信教育で学んでいた日本大学のスクーリングで上京していた時のことです。

私は、1946年夏、小学2年生のとき、太平洋戦争が残した不発弾の暴発で、両眼の視力と両手首をなくしていたのです。20才で大阪市立盲学校中学部への入学を認められるまでの13年間、二重障害を理由に不就学を余儀なくされていました。大学の門は一層難く冷たいものでした。

思い余って、日大の通教には自分の障害を隠して入学しました。しかし通教といえども、必要単位の4分の1は、スクーリングとよばれる面接授業で習得しなければなりません。だからこの年、学友たちにも励まされ、はるばる九州福岡から出かけたのでした。二重障害を知った大学側は、受講を取り止め帰郷するよう執拗に説得しました。今ここで大学の言いなりに受講をあきらめてしまったら、もう二度と大学で勉強することなどできなくなるという必死の思いで踏みとどまりました。

ここにもあった差別と偏見の冷たい壁でした。重くやりきれない気持ち

を持て余しながら、高田馬場の日本点字図書館を訪ねました。福岡から付き添ってくれた妹の良子と一緒にでした。

日点からはすでに多くのテープ図書を借りてよく聞いていました。盲学校の生徒の頃には、寄宿舎で数人の友だちと一緒に、五味川純平の『人間の条件』や、井上靖の『蒼き狼』などを、川野圭泉さんの迫力ある朗読に魅了されながら聞いたものです。卒業してからも福岡の自宅でおうせいにテープ図書を聞きました。松本清張、吉川英治、司馬遼太郎などの作品の他にも、社会科学の分野で『資本主義経済のあゆみ』（レオ・ヒューバーマン）、『賃労働と資本』（カール・マルクス）、『空想から科学へ』（フリードリッヒ・エンゲルス）、『レーニンとロシア革命』（クリストファー・ヒル）など、点字でノートを取りながら熱心に聞いていました。

だからこの時も、スクーリングに役立つ本を探すのが直接の目的でした。職員の方とそんな話をしている所に本間先生がこられ、ご挨拶をしたら私のことを覚えてくださっていました。1962年、点字毎日主催の第31回全国盲学校雄弁大会に、与野福三、畑田源一両先生の指導を得て出場し、『宇宙時代に思う』という演題で準優勝していたのです。普通科2年生の時でした。この大会の優勝者は、新潟県立高田盲学校の古川正雄さんでした。

この大会の様子は、テープ雑誌『つのぶえ』でも詳しく紹介されていたから、先生は私の二重障害についても知っておられました。

応接室に案内された時、榎本千代乃さんにもお会いすることができました。榎本さんは全盲の方ですが、新着のテープ図書を紹介する『テープニュース』の中で、明解かつ個性的な朗読をされていましたから、彼女の声を耳にした時、すぐにそれが榎本さんとわかってとても嬉しかったことを覚えています。

本間先生は、一読者であり一介の学生である私に対して、こちらが恐縮するような、親切でやさしい応対をしてくださいました。館長の本間先生とこんな風にお話できるとは、予想もしていないことでした。

訪ねていった真夏の点字図書館は、故郷のようにやさしく、沸き立つ泉のように、疲れた心を潤してくれました。それが実感でした。

スクーリングで上京するたび、真夏の日点を訪ねました。「これはまだ新しいから藤野さんが唇で読まれても大丈夫ですよ」と言って、出来たばかりの日本史の参考書十数冊を合宿中のホテル宛に送っていただいたこともあり、また中国史の教科書を正確に読んでくれる人が見つからなくて、困っていることをお話すると、すぐに横浜におられた朗読者を紹介し

てくさしました。

点字図書館は本を貸し出す所であると同時に、文化の泉であり、「盲人を守る砦」だという気がしました。

第2の壁

本間先生は、1915年10月7日、北海道増毛のニシンの網元の家に生まれました。先生の生家は今も残っており、2000年夏、増毛を訪ねた水谷昌史さんは、その家の太い柱や高い敷居に触れながら、視力をなくした一夫少年が、ぶつかったり、つまずいたりしたのだらうなと想像していました。

「増毛は海の匂いのする、静かな海岸の町」というのが、彼の印象だったようです。

本間先生は5才の時、高熱性の視神経麻痺で失明されています。ものごとろついてからこの失明に至る年月は、決して長いものではありませんが、見えていた頃の網膜に焼きついた記憶は実に豊富、多彩で鮮明です。お母さんと一緒に歩きながら見上げた夜空の星、海の向こうに沈む赤い夕日、オリの中で巨体を揺らしていた動物園の象、列車の窓から眺めた移り変わる景色、若い叔父の所に嫁いできた美しい花嫁の姿など、それらは健康な視力による貴重な実体験の世界です。

先生の生家は、とにかく一夫少年の視力の回復に全力を尽くしました。名医と聞けば労力を惜しまず尋ね歩き、また、よくきく神さまや仏さまがあると聞けば、それにも望みをつなぎました。6才から8才の2年間は両親共々東京に出て、最高の医療を受けました。しかし視力はついに回復しませんでした。

一夫少年は無類の本好きでした。両親も出来る限りの本を買い求め、少年の好奇心と意欲に応えました。

『日本児童文庫』（全70巻）には日本と西洋の歴史の外に、グリムやアンデルセンの童話、それに「アラビアンナイト」も入っていました。その他にも、講談社の『少年クラブ』、新潮社の『世界名作全集』、平凡社の『現代大衆文学全集』など、一夫少年は沢山の本を買ってもらいました。装丁のしっかりした本を手にとって、表紙をさわリ、ページを開いて、さらに指をはわせていきます。つるつると滑らかな箇所指が触れると「ここには写真があるのかしら」と想像してみたでしょう。

想像力が膨らむにつれ、読みたい意欲が突き上げてきたに違いありません。幸いお店の若い番頭さんや近所の友だちに読んでもらうことが出来ま

した。しかし自分で読みたい時に心行くまで読むということはやはりできません。一夫少年は、これを最初の「壁」として感じています。

だから1929年5月、函館盲啞院に入学し、初めて点字の存在を知り、その7年前に創刊されていた『点字毎日』を手渡され、点字の読み書きを獲得していった時の喜びは大変なものでした。生徒30人、教職員13人の学校でした。

一夫少年は、すでに13才でしたが、小学部3年生に入学しています。しかしそれまでに本を読んでもらうなどして蓄えられていた学習能力が評価され、夏休みが終わった2学期からは、5年生への飛び級が認められ、結局小学部は2年間で卒業し、中部部に進学しています。

点字をマスターして一夫少年は、これで好きな時に読みたい本を自分の指で読めるものと考えました。ところが、当時点字本として出版されていたのは、ごく僅かの文学書や宗教書を除くと、あんま・鍼灸に関するものが大半で、青年の夢を育て、その魂を培ってくれるような点字本は殆どありませんでした。点字で全6巻になるはずの夏目漱石の『我輩は猫である』が最初の2巻までで後が無かったりという貧しい状態でした。点字本が決定的に不足しているというのが、一夫少年がぶつかった第2の「壁」でした。

その頃読んだ好本督の本にイギリスのロンドンの点字図書館には17万冊の点字本があるという話に、一夫少年は遠く見果てぬロマンと、その夢をいつの日か自分の手元に引き寄せたいという、小さいけれども確かな火種をその若い心に刻んだのかもしれません。

点字とテープ

1939年3月、関西学院大学文学部専門部英文学科を卒業した本間青年は、約1年半の準備期間を経て、1940年11月10日、東京豊島区雑司が谷に「日本盲人図書館」を開きました。2階建ての小さなしもた屋で蔵書700冊、本棚4つ、机1つ、椅子2脚、それに郵送用の布カバー100というのが図書館の全財産でした。

その後、蔵書は後藤静香氏を中核とする点訳奉仕活動の広がりによって支えられ、着実に増えていきました。しかし時代はまさに戦争と軍国主義一色に塗りつぶされようとしていました。

1941年3月には、現在の高田馬場に図書館の建物を移し、事業は少しずつ発展していましたが、本間先生の悩みの種は戦火から如何にして貴重

な点字本を守るかということでした。最初は茨城県のお寺を借りて2300冊の蔵書と共に疎開しました。そしてついには、すべての蔵書を故郷の増毛に送って、そこから貸出業務を続けるという状態でした。

1945年5月末、増毛の本間先生の所に「トショカンゼンショウ、イチモツモノコサズ カトウ」という電報が届きました。東京で留守を守っていた加藤善徳さんからの知らせでした。折角手にした図書館の建物は焼けてしまったけれど、幸い点字本はちゃんと残りました。そのことが本間先生夫妻に新たな戦後の出発への希望を与えたといえるでしょう。

やがて東京に戻った本間先生は1948年には、「日本点字図書館」と館名も改め、苦勞の絶えない戦後の時代を乗り越えてこられました。

そして1950年代も後半に入ると、視覚障害者の読書環境に一大変革がもたらされました。それは、テープレコーダーの出現で、録音されたテープがそのまま本として再生されるというものです。これは点字の読みにくい者にとって、福音であったばかりでなく、点字を自由に読みこなせる者にとっても、読書の方法を大きく一回り広げる活気的な出来事でした。

この分野でも、本間先生はその先駆性と先見性を遺憾なく発揮されました。日点内部には消極的な意見もあったようですが、盲学校生徒からの強い要望もあり、「声のライブラリー」を作られました。

最初の頃は、オープン7型テープで、収録時間は2時間でした。その郵送は有料でしたが、本間先生たちの郵政省に対する熱心な働きかけもあって、1961年6月からは指定施設の発受に限りこれが無料となりました。

1966年には、オープン5型テープで、毎秒4.8センチメートル、4トラックのテープレコーダーの開発を進め、1巻の収録時間が4時間になっています。その後、カセットテープの時代になると、今度は、1976年にいろいろなハードルをクリアーして、標準速の他に、半減速のついたカセットテープレコーダーの開発も手掛けられました。

そして今は、デイジーの時代がみえてきています。

学校に行けなかった少年の頃、アメリカにあると聞いた「トーキングブック」に憧れたことを懐かしく思い出し、つくづく科学技術の進歩に感謝しています。

しかしどんなに音声情報の手段が発達しても、読書の基本はやはり点字だと本間先生は考えておられます。私もそう思います。点字の触読にはかなりの個人差があり、私のまわりの速い人では、森泰雄さんや緒方淳子さんなどは、1時間に90ページは普通に読めるようです。私は唇で読みます

から、そういう「スプリンター」のような人を羨ましく思いますが、それでも時速20～30ページで読んでも、点字本を熟読含味する喜びはまた格別のものがあります。

ハンセン病と本間先生

本間先生は、視覚障害のみならず、他の障害をあわせもっている人たちへの思いをより強く持っておられました。それは視覚と聴覚の二重障害をもつ盲聾者であり、またハンセン病に苦しむ人々でした。

ハンセン病は、視覚障害の他に手足の麻痺・変形から、その切断に至ることもあり、皮膚の感覚を無くすことさえありました。だから点字の触読には大きな困難がつきまといました。ごく少数の患者のうちには、唇や舌先を用いて点字を読むというすさまじいばかりの読書意欲をしめす人もいました。

しかしこのようにして点字の触読を身につけても、また1960年代を迎え、テープ図書が普及して、点字の触読困難な人たちへの福音がもたらされても、それらの図書を患者たちが借りだして読んだり、聞いたりすることは、ハンセン病に対する偏見と差別から全くできないことでした。

群馬県草津町にある栗生楽泉園に11才の時から入園されている沢田五郎さん（1930年生まれ）は、次のように語っています。「戦後、われわれが点字を読むようになって、日本点字図書館に点字本を貸してくれと言った時、『そこはハンセン病の施設だから、貸してやれない』と言われた。それで、あの頃こちらも相当憤慨したんだが、考えてみれば、あの頃はまだ園外に出すものは消毒して出したんだな。だから本間一夫先生が貸せないと言ったのも無理ないと思うのだが、貸して貰えなかった。だけど本間先生としては公共図書館としての立場から貸してやれないだけでは済まないと思ったんだネ。厚生省にずいぶん働きかけて、ハンセン病療養所には点字図書費を予算でつけるように尽力してくれて、それでテープの時代に入ると、テープを日点に送ればコピーしてやるという形でわれわれの読書を保障してくれた。また本間先生は、国に働きかけるだけでなく、いろいろな会合や講演などの機会に社会にも随分熱心に訴えてくれて、そのためにテープ図書の状況は大いに改善されましたよ」

本間先生は、沢田さんが言われるように図書の貸し出しを断りましたが、それを良しとせず、患者たちの実態を知り、その要望の強いことを感じると、より一層積極的に扉をたたき、道を開く事業に取り組みられました。国

立のハンセン病療養所は、北は青森から南は沖縄県の宮古島まで、全国に13箇所あります。先生は地方へ出かけられると、よくその近くにある療養所を訪ね、盲人会の人々と懇談されました。東京都下東村山市の多摩全生園や、群馬県の栗生楽泉園には多くの友人をもっておられます。

私自身、北條民雄の『いのちの初夜』というハンセン病で苦しむ人々のことを活写した1冊の小説を入院先の看護婦さんに読んでもらい、そのことがきっかけとなって、唇で点字の触読を獲得しましたから、ハンセン病については強い関心をもっていました。だから本間先生のハンセン病患者への熱い気持ちに共感するところが非常に大きかったです。

ロゴス点字図書館長は語る

ロゴス点字図書館（元・カトリック点字図書館）館長の橋本宗明さんは、1972年から89年までの17年間、全視協（全日本視覚障害者協議会）の会長として視覚障害者の生活と権利を守る運動の先頭に立ってきた人であり、私にとっては人生と運動の先輩でもあります。

6月に本間先生をお訪ねした時、橋本さんと私の間をよく知っておられる先生は「橋本さんがカト点の館長になれる時は、人事のことなので、口出しはしなかったけれど、少し気になっていました。でも『あけのほし』を読んでいても、ほんとに立派な仕事をやっておられますね」とお話されました。私としては親しい先輩のことを褒められたのですから、気分の悪くはありますがありません。7月20日、カトリックの障害者団体の集会で来阪していた橋本さんに時間を作ってもらい、喫茶店で本間先生のことを中心に話をしました。その時、橋本さんが話されたことのごく一部を以下に記します。

「カトリック点字図書館は1953年に創設され、1992年に私が3代目の館長になった。2年前、社会福祉法人になる時に館名を変更している。本間先生と同じ仕事の道に踏み出したといっても、こちらは山の麓から振り仰ぐほどの相手は、やはり雲の上の人。館長になった時、挨拶も兼ねて日点を訪ねた。館長としての心構えを教わるためだった。『人の意見をよく聴くこと』。教えはこの一点に尽きた。それはなんら目新しいものではなく、鮮やかな印象とはならなかった。しかし、それから10年余り、この仕事をやってきて、あの時の先生の言葉の底の深さがしみじみわかる。人の意見を聴くということが、どんなに厄介なことかよくわかった。人の意見と自分の意見とが食い違っている場合、それをすり合わせて如何に調整し、実践

していくか、これは生易しいものではないから。

それから、本間先生は大卒の仕事を推し進めまとめていく力量と共に、沢山の人のこまめに短い手紙を書いておられる。それが点字用紙半分の手紙であっても、受け取る側からいえば、『あの、天下の本間先生から』という嬉しさが心に残るわけだ。そういうきめ細かい心配りは、管理職というか、上に立つ者としては、大切なことだと思う。私も見習いたいと思っているが、書きはじめると、ついつい長くなってすぐ3枚くらいになってしまう。

盲学校の生徒の頃には、鷺ノ宮から電車1本で図書館に借りに行けるので、夏休みなど点字本をよく借りに行って読んだ。中にはヨレヨレで、しかも点字の間違いもかなりあったけれど、そんなのは全然気にならなかった。特に、ショーロホフの『静かなドン』、小松左京の『日本沈没』などは、規模壮大で読みごたえがあった。

あの頃の点訳本には、そのなか表紙の次のページに、本間先生がその点訳者について、短い紹介文を書いておられた。一点一点、この本を点訳された見ず知らずの点訳者がどんな人かよくわかって、それがとても楽しみだった。

これも、学生時代の思い出だが、11月に開かれる感謝の集いで、読者を代表し『感謝の言葉』を述べたこともあった。雨の日で、長靴を履いて出かけたことを今も覚えている。

テープ図書も聞けけれども、やはり読書の基本は点字だと思う。テープはどちらかというとパッシブな読書法だから、疲労しやすいし、眠くなってしまう。そこへいくと、点字は活字の読書に限りなく近い。なぜなら脳が文字に働きかけて、文字から意味が伝わり、それで『わかる』ということが成り立つのだから。

そういうことからいって、本間先生の夢であるでっかい点字は、大賛成 !! 岐阜の藤野さんが既存の32マスのデータのまま、A4サイズで実用化しているのは、素晴らしい。これは非常に読みやすい。これは大きな流れで、私は将来B5からA4になると思う。かさばるのはうんざりするけれど、読み手が増える方がいいに決まっている。昔は紙を節約する意味もあって、37マスの点字版があり、それを読めるのが1つの自慢だったが、高齢化が進む今では、難しいだろう。

活字の世界でも、新聞の文字を大きくしようというのが流れだし、すでに始まっている。『盲人文化記念館』のようなものは、やはり意味があると

思う。盲界の先輩たちの業績が本に書いてあっても、後世の盲人が読まないということも十分にあるので、野球の殿堂入りではないけれど、物理的にそういう記念館を創るのは理解できる。

本間先生の夢は、後に続くわれわれが引き継いでいきたい」

全視協と本間先生

私は1975年から2001年まで、26年間にわたり、全視協の役員をし、特に最後の4年間は神奈川県和市川邦也さんの後を受けて、会長を務めてきました。ですからその間、運動の面でも本間先生には少なからぬ助言と協力をいただけてきました。

今も継続発展している「手をつなごう。全ての視覚障害者、要請行動」の、第1回全国集会を1984年9月に開いた時も、先生は日点の図書館長として、また日本盲人福祉研究会（文月会）会長としてご参加くださり、鋭い指摘と共にあたたかい励ましのメッセージをいただきました。

先生は、次のように述べられています。「盲界には不一致な点がありにも多すぎると思います。そんな中で今度の集会の場合『共通する部分で』ということにしても、36もの団体をまとめるというのは、大変なご苦労だったに違いありません。改めて事務局のみなさんに対し、敬意を表します。施設に携わる者として、大いに勉強させていただきました」

1998年12月に、全視協が視覚障害者のパソコン購入に対する公費助成を求める大運動を呼びかけた時にも、先生は喜んでその賛同者に名を連ねてくださいました。芝公園福祉会館で開かれた集会にも参加してくださり、たまたまトイレでお会いした時、「ああ丁度良かった」とおっしゃってカンパをいただいたのも、今は懐かしい思い出となりました。

全視協の機関誌『点字民報』が、シリーズ「対話と共同」という企画のなかで、私との対談をお願いした時も快くお引き受けくださり、土曜日の日点をお訪ねしたことがありました。この対談は、1998年の8月号に掲載されています。

先生は、私が全視協会長になった時にも大変あたたかい激励のお手紙をくださいましたが、会長を退任し、また30年間の大阪市盲での教職生活を終えたときにも、丁寧なお手紙をくださいました。友人たちが呼びかけ人となって昨年5月に私の慰労会を開いてくれました。私は、先生へのお礼の手紙と共に、ご挨拶のつもりでその案内状も同時に投函しました。それに対する先生からの4月8日付けのお手紙を最後に記させていただきます

す。

「新年度を迎えてもう1週間が去ります。時の流れは止まりません。

直接のご丁寧なご挨拶、みなさん主催の記念会のお知らせ、その2通を今拝読しました。特別のご不自由の二重の障害をもたれながら盲教育に、また、福祉活動によくお働きくださいました。あなたのみの知る苦勞、喜び等さまざまを体験なさったことでしょう。本当に大変だったと思います。私も高齢のゆえか体調が万全とは言えず、遠路でもありますので、ご会合には出席できませんが、こころからのお慶びをもうしあげ、またこれからのお仕事の上で何かお役に立つことがありましたら、ご遠慮なくおっしゃってください。当日お集まりの皆様にもよろしくおっしゃってください。

なお、今私は3人の女性が秘書として代わりあって来てくれておりますが、その中の、紙谷一枝さんは、あなたの『あの夏の朝から』、あのご本を発行された当時、読んでおり、今も持っているようで、もう一度読みたいと申しております。

東京へいらっしゃることがありましたら、是非お立ち寄りください。お待ちしております」

あとがき

本間先生の懐かしい肉声が耳底に残っています。編集部から1万2000字の紙数をいただいたときは当惑するほどの分量に思えました。しかし本間先生に関する色々な本を読み、テープを聞き、資料に当たりながら書き始めると、いつ知らず心の高揚を覚え、もっとたくさんの枚数になってしまいました。またいつの日か発表の機会があればと思います。

本間先生とそこご家族、そして日点の職員の方々には特別にお世話になりました。その他たくさんの方に相談したり教えていただいたり資料を送ってもらったりしました。本当にありがとうございました。

障碍者と共に歩む

あ お き ま さ る み ち よ
青木優・道代夫妻

今駒 泰成

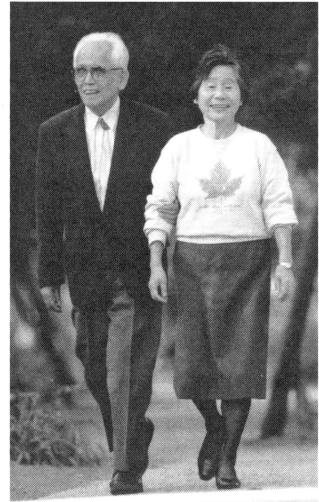
2005年2月 No. 201 掲載

1.

青木優著『行く先を知らないで』によれば、
「中学生時代、重い腸チフスにかかり高熱のため意識不明になったことがあった。そこから助け出されたとき、私は医師の働きの尊さを知りそれが医学への志となった」とある。

やがて岡山医科大学医学専門部に入学、卒業後、広島大学付属病院でインターン中に結核性の「若年性反復性網膜硝子体出血」という病名で両眼失明に至る。24歳の秋であった。医師として社会に出ていく直前の出来事に「なぜ？ どうして？」との問いに悶え苦しんだ。この哲学的、宗教的問いのさなか、呉平安教会の山田忠藏牧師の訪問を受け、岩橋武夫の著『光は闇より』を読む機会を得た。その書で聖書のヨハネ福音書9章1－3節の言葉に初めて触れる。失明は、神のわざがその人の上に現れるためであるという、あの不思議な言葉である。まだ神を信じるには至っていないが、無限の可能性に向かって人生は開かれることを彼は直感的に感じ取った。それはほんの一瞬の光であったが、その後も山田牧師、設楽副牧師のたびたびの訪問を受け、「神は君を愛しておられる」ことを聞かされる。それに対して彼は「もし本当に神が愛であるならば、私の目を再び見えるようにして欲しい」と反発する。しかし、そのような状態の中で1つの転機が来た。母との出会いである。その事を彼は次のように語る。

「母は毎日看病に来てくれていた。にわかの失明のため食事をとるのもおぼつかない私の助けをしてくれ、終わると持ってきた新聞を読んでくれる。社会面はともかく、慣れない政治・経済面などはその読み方がたどたどしくもどかしい。私は腹を立て母に鋭い言葉を投げた。やがて母がすす



り泣くのを聞き、私は自分のわがままを心から詫びた。それに応えて母が言った言葉に私は胸を打たれた。『あなたはこれまでこの新聞はおろか、どんな厚い本でも思うままに読んできた。それなのに今のあなたの不自由さを思うと、私はそれが辛い……』と。

その後、母は『出来ることなら私の両方の目をあなたにやりたい』と繰り返しつつやくようになった。本当の愛というものは、苦しみを分かち合う、いや自分の持っている最も大切な物を与えても惜しくない、ということなのだと、聖書の語るイエスの言葉を改めて思い起こした。春まだ浅い夜、母が帰った後、私はベッドに起きあがって初めて祈った。すると今まで全身を押さえつけていた、いい知れぬ重荷が急に去り身体が軽くなった。見えない私の目の前に、山かげの湖水に陽が照っているような穏やかな静けさが広がった……。これが私の救いの経験である……」

やがて彼は点字を習い始め、視覚障害者としての第一歩を歩き始める。父のステッキを借りて一人歩きの練習もする。初めての一人歩きに不安を覚えていたとき、全盲の牧師熊谷鉄太郎に出会う。「君、信仰によって歩き給え。そうすれば恐れなく歩けるようになるよ」と励まされる。一人歩きをしながら人の気配を感じると「こんにちは！」と先に挨拶するようになり、積極的に社会に出ていくすべを会得した。やがて聖書の紙芝居を持参し「青空子ども会のセンセイ」までもやれるようになる。

やがて彼は、聖書を学びイエスキリストを広く知らせる伝道者になりたいと、1952年東京神学大学受験を目指す。はじめは「今まで盲人を受け入れて神学教育をしたことがないから」と受験を拒否される。しかし彼の決心は固く、山田牧師の力添えもあり「テストケースとして」という条件で3年の編入学試験を受け、寄宿舎での神学生生活が始まる。入学してみれば学友や教授たちの協力もあり、4年後大学院を卒業する。

2.

神学校入学前、呉平安教会で1人の女性に出会う。「もし宜しければ本をお読みしましょうか？」という彼女の申し出により、以後週に1度、教会の一室を借りてリーディングサービスを受け、様々な書物を2人で読んだ。「僕のために一生本を読んでくれませんか？」がプロポーズの言葉だった。やがて彼は神学大学、彼女は牧師のパートナーとしての将来を考え東洋英和女学院短期大学の保育科に入学する。2人それぞれに卒業した1956年4月結婚。花嫁の純白の振り袖衣装は彼の母が喜びを込めて縫い上げたもの

だった。しかし挙式を待たず母は脳出血によって急逝、悲しみの内に彼らの牧師夫妻としての旅立ちが始まった。

岩国東教会における副牧師としての4年をおえ、同じ山口県の小郡教会に主任牧師として赴任する。小郡は地域柄労働組合の組織が少なかったこともあり、教会も「働く人たちの権利擁護の活動」に参加していく。青木夫妻のその後の長年にわたる人権擁護の働きの発端であった。障害を負う人々・子どもたちとの出会いも小郡からであった。町の盲人会との関わりもでき、山口県の盲人基督者の団体「山口県盲信徒会」も結成される。その後、優氏は日本盲人基督教伝道協議会の議長としても東奔西走した。

小郡教会に着任して3年ほど経った頃、教会関係の幼い子どもを持つ親たちから、教会付属の幼児施設をつくって欲しいという要望が出た。幼児教育の大学に学んだ牧師の妻がその責任を負うことになるのは必然であった。1964年「すみれ園」が開設された。開園2年目、町の幼児施設から入園拒否された視覚障害を持つ子どもがやってきた。3年目4年目と次々に多様な障害を持つ幼な子たちが入園してきた。障害を持つ子も持たない子も隔てなく遊び、共に育ち会う姿を見て大人が逆に学ばされ「統合教育」の実践が豊かに実っていく。それはいうなれば、近代主義のこの国の生産第一主義、能力主義の価値観に禍された教育関係者の、弱者への偏見と差別の実体が今なおさらけ出され、あぶり出されている証拠のように思える。

すみれ園の幾つかの例を紹介しよう。

①園児の中に先天性脊椎二分症のため下半身マヒの子どもがいた。勝美くんだ。

この子はスキップができない。彼をのけ者にしないで一緒にダンスはできないかと子どもたちは考えた。やがてみんなで手を組み合せて「おみこし」をつくり、彼を真ん中に乗せて「おみこしワッショイ」と練り歩くことを思いつき楽しく遊ぶ。みんな満足だった。勝美くんはその後、小・中・高・大学と、普通学校へ進み、彼をのけ者にしようとする偏見教育の場を、友だちや仲間と一緒に変えていったという経過が見られる。

②出産時の障害で右半身と言葉が不自由な奈美子さん。3歳の頃、よく転ぶので、すぐに手を出して助け起こそうとする大人に向かって、側にいた5歳の男の子が「おばちゃん、奈美ちゃんが泣いているからって、すぐに助けなくてもいいんだよ。奈美ちゃんが『助けて』といったとき助ければいいんだよ」と注意する。すみれ園の子どもたちは4、5歳にして「助けられる側の主体性を尊ぶ」ことを知っていた。

③全身マヒの倫太郎くんは、言葉は不自由だが首を縦に横に振ってイエス、ノーを表現した。園庭にあるペカンの木の根元で遊んでいるとき、仲間が木登りを始めたのを見て自分も登りたいという顔をする。それを見て子どもたちは思案する。その様子を見て若い先生が声を掛け、本人と仲間たちの了解を取って倫太郎くんを背負い木に登った。いつも寝かされているか、もたれかかるかして周囲を見ていた彼の初めての「冒険」である。木の下で見上げる子どもたちの声援は「りんちゃん、がんばれ、せんせい、おとすなよ」であった。たとえ背負われてであっても、「木登りをしているのは倫太郎くん自身であり、彼を背負っているのは自分たちの委託を受けた先生である」という認識が彼らの内にあった。障害者の「自立」を支える「パートナーシップ」の誕生である。育てたのはすみれ園である。

この倫太郎くんは、後に小学校から、障碍児ゆえに閉め出されたとき、毎日その小学校の裏門の前に出かけていって介護の青年と一緒に勉強した。雨の日も、雪の日も……。それを応援する親と周囲の人々がいた。文部省（当時）の養護学校義務化（1979年）の通達を忠実に実施することしか念頭にない人々の愚かさは、いつ無くなるのであろうか。倫太郎くんと両親の6年間の戦いのことを、弟の堅次郎くんが書いた文章が、昨年の法務省人権擁護局の人権週間作文に入選し、山口県法務局長賞で表彰されたことを付記しておこう。中学3年生の堅次郎くんは15歳離れた兄のことを「すごい人なんだ」と誇りを持って書いている。「りんちゃんとその仲間たち」をモデルとした青木道代作・童話「ペカンの木のぼったよ」は、傑作絵本として福音館書店から全国出版され、ハングル語でも韓国から出版された。透明点字シート付きも「共に歩む」ネットワークで作成し、幼な子を持つ視覚障碍の親たちに喜ばれている。



3.

小郡での青木夫妻の働きは26年にわたった。それは共に歩み始めて以来、変わることなき「共に」の働きである。何よりも道代夫人との「共に」である。それは2人が1986



年東京に移って調布柴崎伝道所を設立し「共に歩む」ネットワーク活動を始めて以来18年余に及ぶ「全国の人々と共に」の働きに広がった。2004年12月現在、障害を負う人々・子どもたちと「共に歩む」ネットワーク会報紙「共に歩む」は82号を数え、夫妻の訴え・主張と共に現場活動報告・各地からの声を載せて3500部を発行し続けている。

夫妻が小郡教会を辞し東京で新しい活動を始めようと決意したのは、倫太郎くんが正式に地域の普通中学校の学籍を得て入学した年、青木優氏還暦の時点であった。この時道代氏はこれまでの夫の後ろに従い、障害を負う夫を支えるといういわゆる「妻」の枠を越えて互いに「パートナー」として並んで歩く決意を表明した。それが「共に」の新しい意味の1つであったといえる。

また、ここには「視覚障害者は視覚障害者のこと」として専門化されてきた意義に変革が求められているのではあるまいか。それはもとより例えば「視覚障害者」の負う個性としての区別を曖昧にしてしまうことではない。それが活かされる場所を広げるのである。それが統合（インテグレーション）である。従来例えば「日本盲人基督教伝道協議会」というように、盲人への働きが専門化されていた、もちろんそれが他の障害者を差別するものではなかったが……。障害の違いを知ってそれを補い合う契機とするものであった。そのための「共に」であった。そのように人は早くから気づきながらやってきたのであろう。だからこの国の障害児教育も、はじめは盲者、ろう者、あ者が区別なく扱われ、後にそれぞれが別学となったというのではないのか。さらに障害を負う人々の多様性は著しい。数々の身体障害に知能の障害、精神障害も多様化している。青木夫妻の働きからその提唱しているところがはっきりとしてくる例として、ある「共に歩む」イベントの報告がある。イベントでは障害を持つ人と持たない人とが互いを「パートナー」と呼び合う（一方が一方を助けるだけという意味合いのあるボランティアという言葉は使わない）。苛酷な受験競争に疲れ孤独に陥りそうになった少年が参加し、知的ハンディを持つ年下の少年から「お兄ちゃん、また会えてよかったね」と握手を求められ心を揺さぶられる。そこには「助ける者、助けられる者」の固定された境は消えている。これが「共に」いることなのである。青木さんたちはそれを最近インクルージョン（包み込む）と表現している。この言葉は1994年発表されたユネスコのサラマンカ宣言から使い始められた。

「障害」とは1つの個性なのだ。もしその「個性」のゆえに不自由を感じ

じる障壁（バリア）があるならばそれを1つ1つ取り除いていこう……との呼びかけで、「共に歩む」ネットワークの働きはいつも盛り上がっている。

4.

障碍を負う人々・子どもたちと「共に歩む」活動を始めて3年経過した頃、夫妻はスウェーデンへ1カ月の旅をした。1989年9月から10月のことだ。この福祉先進国の在りようが福祉の希望の星とされている。しかしまた、一面では高福祉高負担に伴う国民の重税感と、福祉に依存するあまり勤労意欲を失うとの批判もある。実体はどうか。青木夫妻は共著『スウェーデンの心を訪ねて』（日本基督教団出版局）で240ページにわたり克明なレポートを行なっている。

それによれば、1968年に統合教育基本法が制定された。1987年には国内の盲学校は廃止された。といって障碍児が普通学校に放り込まれたというわけではない。学習保障は障碍の程度に応じて緻密になされている。障碍を負う幼児は保育園・幼稚園で学ぶ優先権を持つ。企業に就職した障碍者の給料の50%は国が企業に支払う。勿論、総論賛成各論反対で足踏みする企業もある。障碍者の施設建設に反対する地域があるのはどこでも同じ事だ。しかし彼らは「人間みな平等」の原理に立つことを繰り返し強調する。こうした実体を押さえながら青木夫妻は率直に問い、学ぶ。そこは「優しい社会をつくる闘い」のあるところだ。「弱さを生かす思想」を持つところだ。

視覚障碍、知的障碍そして腎機能障碍という三重の障碍を持つアンドレアスくんは、地域の義務教育（原則として小中一貫）の普通校に学んでいた。放課後は学童保育で生活を楽しむ。彼の母親は医科大学に通っている。

「障碍児の親であるからこそ障碍を理解できる、だからそれを生かして理解ある医者になりなさい。そのためには協力を惜しまない」という政府の方針である。ここでは障碍児の親であることがメリットとなる。スウェーデンでは障碍児の母は「キャリアウーマン」と呼ばれる。同じような日本の母親がどんな扱いを受けているかを考えると暗澹たる思いがする。「障碍児の親」であるが故に社会の片隅におかれ、障碍を負う子どもの世話に追われて自己実現もできない状況にあるのが一般の「障碍児の母」の姿ではあるまいか。障碍があっても自信を持って堂々と生きる社会、それを当然のこととして支える人々の社会、家族に障碍を負う人・子どもがいることが祝福であるような社会、それをスウェーデンは目指しつつ前進している。

青木夫妻はスウェーデン国内で目立たない、日本からの福祉関係訪問者が訪ねたこともない人口6万の小さな町を訪ねた。ストックホルムから車で6時間もかかるところだ。この訪問はヴェクショウというその町で大きく報道され歓迎された。その町は、細かいスケジュールを立てて青木夫妻を迎える準備をした高齢者住宅研究者ソルヴェイさんにとって思い出深い町だった。彼女の長男、重度障害を負う息子さんが青年期、手厚いケアを受けた施設（ホーム）があり、彼女は仕事を終えた週末には自家用車で遠距離訪問した。彼は亡くなったが、その素晴らしいホームを青木夫妻に見て欲しかったのだ。そのことを後で知り、優牧師は言う。「私たちは主イエスキリストに導かれてこの旅をしたのだ。聖書は語っている。＜イエスは言われた『若者よ、さあ起きなさい。』すると死人が起きあがってものを言い出した＞（ルカ福音書7章14・15節）——。

「共に歩む」草の根の活動がこれからも少しずつ拡がり、真のノーマライゼーションの社会へと向かって1歩ずつ前進していくことを今、私たちは多くの若い仲間たち、子どもたちと共に働きつつ願っています」と語る青木夫妻……。

優さん1924年生まれ、道代さん1933年生まれ、80歳と71歳のお2人の若々しい日々には神の祝福豊かにあらんことを……。

盲女性の自信と誇りを体現した慈母

^{あわづ}栗津 キヨさん

興水 辰春

2008年7月 No. 242 掲載

はじめに

昭和の時代、盲女子界の三羽ガラスと呼ばれた偉大な先人たちがいた。戦後、青山学院大学に進み、横浜訓盲院の教諭から東京サフランホーム初代寮長となり多くの盲女子を社会に送り出した高田富美野さん。平塚盲学校で教員を務め、定年退職後サフランホーム寮長となった田代姫代さん。そして、高田盲学校で教鞭を執り、知的と視覚に障害を併せ持つ子どもたちの教育に尽力した栗津キヨさんである（以下敬称略）。

栗津キヨに関しては、彼女をモデルとした児童文学『ふみ子の海』（市川信夫著）が、劇場用映画として2007年秋公開されたことからその名前を知る方も少なくないのではないと思われる。だが、「キヨ」ではなく「ふみ子」が主役の同作品は児童向けに書かれたフィクションであり、キヨの実人生とは乖離している面も多い。そのため本稿が読者の皆様にとって、今年2008年9月に没後20年を迎える「ふみ子」のモデルとなった人物について知っていただく機会になればと考えている。なお、映画は現在も全国各地で自主上映会が催されているので、公式ホームページ*で情報を確認して欲しい。

キヨは本誌『視覚障害』や前身の『新時代』に数編の文章を寄せており、そのどれもが彼女の生き方を強く反映している。

本稿では、キヨの残した著作物と、大学のクラスメートを中心として結成された「失明女子を考える会」で最もキヨと近い存在であった伊藤泰子さんのお話に基づいて、先覚者としての栗津キヨの生涯と思想を振り返ってみたい。

生い立ち～自立へ

栗津（旧姓・金井）キヨは1919（大正8）年、新潟県東頸城郡牧村（現在の上越市牧区）に生まれ、4歳の頃に栄養不良から角膜に腫瘍ができ失明する。豪雪の山村地帯では、栄養失調から目を病む者が多かった。今でこそ越後地方の文化として語り継がれる瞽女もまた、こうした地獄的背景

があって成立した職業集団ということもできる。

キヨにとって幸運だったのは、京都盲啞院、東京の楽善会訓盲院について全国で3番目の盲学校として知られる高田盲学校で学べたことだった。小作農家であった金井の家はキヨを学校へ行かせることができるほど裕福であったわけではないが、盲学校の教師が峠を越えて就学の勧誘に再三足を運んだことが後押しとなり、1928（昭和3）年9歳で高田盲学校に入学。家族の協力により8年間を過ごした盲学校で、あん摩・鍼・灸の実技を学び資格を得て、社会へ出るための基礎を身につける。

1937（昭和12）年春、盲学校を卒業すると、単身上京し、斎藤百合の主宰する陽光会ホームに入所する。キヨの生涯の師である百合と上京に関する経緯については、キヨが晩年に上梓した岩波新書『光に向って咲け―斎藤百合の生涯―』（1986年）に詳しい。この当時「女按摩」と呼ばれ差別されていた盲女性の地位向上を唱えていた先駆者・斎藤百合は機関誌『点字倶楽部』の誌上で、若い盲女性たちに「盲女子高等学園」の設立を訴え入学を呼びかけた。卒業間際の盲学校で『点字倶楽部』誌上の入学案内を読んだキヨは百合との手紙のやりとりの結果、学園に入学する最初の生徒となる。学園は資金面等の問題で開校が見送られたが、キヨは陽光会ホームに寄宿し、点字製版・印刷、家事・編物、マナーなどの生活技術を学ぶほか、盲女性として社会に対応していく心構え、人間としての誇りを持って生きることへの自信、キリスト教への信仰を得ることとなる。

その後、昼間は陽光会での仕事をしながら、夜はYWCA駿河台女学院で3年間学ぶことで基礎的な学力を身につけ、1943（昭和18）年、百合の母校であった東京女子大学に高等学部特別生として入学する。授業料は有志の拠金による奨学金や寄付金によって賄われていたという。そうして通うことになった念願の女子大学でキヨはその後の人生を支える多くの友に恵まれる。伊藤さんは、その代表的な女性だ。

「普段から見えないような顔をしていませんでしたし、見えないからどうのというようなこともありませんでした。盲人とのつきあい方を教えてくれましたし、お互いに女性同士ですから腕を組んだりなんて自然のことですよ」



左・栗津キヨ、右・伊藤泰子
（1986.7.5「光に向って咲け」出版記念会）

当時の様子をつい先日のことのように語られる82歳の伊藤さん。さらに彼女にとって忘れられないこんなエピソードも。

「春の気候の良い頃でしたか。クラスメートが連れ立って学長だった石原謙先生の住む荻窪のお宅へ招待されることになり皆で向かいました。かなり歩いてから、誰かが気づいたんですね。キヨさんがいないって。私たち、置いてきてしまったんだって。急いで大学へ戻って見たら、キヨさんがそこでずっと待っていたそうです」

だが、こうした学生生活も戦争のため長くは続かなかった。級友たちは勤労動員となり、キヨもまた1944（昭和19）年7月、百合、そして陽光会ホーム解散後に行き場のない人々とともに静岡県引佐郡鹿玉村（現在の浜松市浜北区）に疎開することとなる。村人たちの暖かい協力は得られたものの見えない人たちが寄り集まっての疎開生活はやはり大変だったようで、その様子が著書でも1章を使って語られている。中でも「真夜中の出張治療」の項は、キヨが見知らぬ男の漕ぐ自転車の後ろに乗って峠越えの出張治療に出向いた一晚を綴ったものだが、著者の感情を大きく交えずに記された作品のなかにあって、彼女の心情が生々しく語られている数少ない部分として印象的である。

戦後、キヨは復学し、秋元梅吉が開設した保護施設「東京光の家」（杉並区、現在は日野市）に住み込み、点字製版の仕事を手伝うことで生活費を捻出しながら大学に通った。そして、1947（昭和22）年1月、師・斎藤百合と永別することとなる。キヨは26歳になっていた。『新時代』第4号（1966年4月）に掲載された「斎藤ゆり先生を偲んで」という一編は、晩年の著作『光に向って咲け』の草稿とも言える作品である。その中でキヨは、百合に対し「若し終戦後の日本だったら、ゆり先生のものの見方、考え方はもっと多くの人に理解されたであろうし、経済的な支えもあって陽光会の発展も望めたであろう。ゆり先生は20年早く生れすぎておられたように思われる」と綴っている。理想主義であった百合の思想・行動は確かに時代に早すぎたのかも知れない。彼女の陽光会ホームには、冒頭で記した高田富美野や田代姫代らが身を寄せていた時期もあり、後の世代になって花開いたことがその証左であろう。

百合を失ったキヨは、同年春、大学の研究科を卒業し、それまでに身につけていた点字書の製版印刷技術を活かし点字出版所・富士根園（静岡県富士宮市）に勤めることになる。

教師として、女性として

戦後の富士根園では、志賀直哉著『小僧の神様』『清兵衛と瓢箪』、太宰治著『斜陽』などの名作を点字書として出版し、全国の盲人から喜ばれていた。また、盲学校で使用される数学の教科書類も作成し、教育面でも貢献していた。後に教師となるキヨにとって、大きな刺激を得る時期であったであろう。

1951（昭和26）年春、キヨは母校高田盲学校の教師として郷里に戻り、その後25年間教鞭を執り続ける。特に知的と視覚に重複して障害を持つ子どもたちの教育に力を尽くした。『新時代』第10号（1969年10月）に「この子等にも生き甲斐ある生活を」と題して寄せた作品からは、キヨの教職者としての考えを読み取ることができる。

「越後路も三月にはいと急に日の光はあたたかさを増し、庭の雪は日毎にへっている。幼い娘が川岸から見つけてきた露のとうの素朴な香りに、ひとしお春の訪れを感じる。それはきびしい吹雪に耐えてきた者のみが味わう喜びでもあろう」という美しい導入から始まるこの一編はキヨが49歳の頃に書かれたもので、この後「ふえつつある盲弱視精薄児」「精薄児の実態」「職業対策」「盲弱視精薄児のアフターケア」という章立てで本論が展開される。主に研究と調査に基づく論考であるが、結びの部分にキヨの性格が如実に現れている。

「私は毎夜勤務を終えて立ち寄る教え子の病室で、もの言わぬ子の脈をにぎりながら繰り返し考える。『この子が若し気がついて前より重い知恵おくれになっても、それなりに生き甲斐のある生活をおくり得る施設が欲しい。就職した子供達が立派に勤めてくれれば良いが……。施設におくった子供達には彼等に適した仕事が与えられるだろうか？ どの子もそれほど長い生命ではないかもしれない。それだけに生きている間はなにか生産的な、人の役に立ったという喜びを持たせてやりたい。』『弱い者の上に神の御業が現れるように』、といつしか祈りにかわっていく。それが私のこの頃の日課になってしまった」

こうしたキヨの祈りは実際の行動となって現れている。社会福祉法人東京光の家「盲重複施設新生園」設立のきっかけを作ったのがキヨだったのである。昭和40年代、キヨの受け持っていた生徒に三療コースへの進学の高い者がいた。キヨは救護施設であった光の家に彼の入所を懇願する。彼は光の家で受け入れられるのだが、その後、各地の盲学校から同様の生徒を受け入れるようになった光の家では、社会のニーズに応えるために

1979（昭和54）年春、重度身体障害者更生援護施設「新生園」（盲重複障害者専門）を開設したのである。

「誰にでも気を使う人。困っている人がいたら何かをしなければいけない、と芯から考えている人」と伊藤さんの語るキヨの性格は職業面でも一人の女性としても通じたものであった。

粟津清之は中国戦線で負傷し失明する。片腕を失い、残された腕の先に指は2本しかなかった。キヨは東京光の家で出会った清之と結婚する。1953（昭和28）年春、キヨは33歳だった。

「本人はそうは言わないだろうけれども……」と伊藤さんは口を開く。「気の毒だから私が一緒になってあげなければ、という性格が働いたのでしょう。自分が必要なら動こう、という強い気持ちを持った人でしたから」キヨは百合との死別の際し、こんな言葉を遺されている。「あなたは1人では生きられないから結婚しなさい。あなたはまだまだ駄目だ」と。百合の没後、1人自立した日々のなかでキヨが強くなっていたのか、性格によるものなのかはわからない。が、キヨは厳しい道を歩むことを選んだのである。

その後、子を授かったキヨだが長男を死産、次男は生後間もなく命を終えている。だが、1957（昭和32）年には長女を、1960（昭和35）年には次女を無事に出産し、母となる。家庭生活には苦労を伴ったことが想像されるが、郷里に戻っていたこともあり縁者からの支援も受けていたようである。また、亭主関白の家庭だったというが、夫清之は自分で出来ることは全てきちんとこなしていた。晩年には、家族の誰よりも早起きをして、僅かな指を使い器用に洗濯をし、きれいに干したそうだ。

キヨの家庭観・女性観については本誌No.86（1986年11月）に掲載された「盲女性には自信とほりを持って」という2ページ評論が参考となる。

「今年から日本でも、職場の男女差別はなくなり、すべて平等に扱われることになった。もちろん責任を果せる女性には権利もチャンスも与えてほしい。けれども、権利には義務がついて回るものだから、すべての女性が男性と同じように働くとしたら、必ず無理が生じ、そのしわよせが家庭に及ぶだろう。男性に負けたくない、男性に追い付こうという努力は無益だとは思わないが、そのために女性本来の使命がおろそかにされるのではないかと不安になる。一時『お茶汲みストライキ』という言葉がはやったものだった。お茶は女がつぐものと決めるのはおかしいが、お茶を汲むことがどうして女性の価値を下げることになるのだろう。職場を暖かくする

というほこりを持って、お茶を汲むこともできるはずである（中略）私たち盲女性は何かと人の援助に頼ることが多い。それはそれとして、自分の立場をいつもしっかりと守っていたい。職業人として、妻として、母としてカタイジをはるのではなく、自信と誇りを持って生きていきたいと思う。目のない者が、目のある社会で生きていくのは難しい。それでも暖かさや明るさは持ち続けたいものだ」

重複障害を持つ子どもたちの教師として、自らより重い障害を持つ夫の妻として、そして二女を持つ全盲の母としてキヨがどのような生き方をしていたのか。陽光会ホームで培われた自信と誇りに支えられた日々だったに違いない。

終わりに——「失明女子を考える会」

キヨは次女の産後、酷い出血のため貧血状態となり輸血を受ける。このとき、血清肝炎を起こしてしまう。1975（昭和50）年夏には狭心症の診断を受け、翌年、長女の大学進学、次女の高校受験、そして本人の通院のために、25年間勤めた盲学校を退職し、一家で上京。足立区に構えた自宅で三療を営みながら通院生活を開始する。その後、長女が母の母校である東京女子大学に合格したことは、大いにキヨを喜ばせたであろう。

1980（昭和55）年、東京女子大の同級生たちはキヨを囲み「失明女子を考える会」を結成する。会の名前通り、盲女子の現状と課題を考え、地位向上の一助となるための活動を目的とした。「皆子どもも大きくなり手がからなくなっていたので、そのような活動ができたのだと思います。変な名前だね、と笑ったりもしましたけど、会の名前より活動の方が大事でした」と伊藤さんは振り返る。同窓会の中に朗読奉仕グループを発足させたり、点訳講習会を始めたりしたが、その活動はキヨが「斎藤百合の生涯」を完成させるための協力へとシフトしていった。

通院やサフランホームへ三療の技術を教えにいくキヨと週に3～4日は一緒だったという伊藤さんは当時の様子をこう語る。「闘病生活は辛いものだったと思います。明らかに口数が少なくなっていくのがわかりました。でも、サフランホームでは寮生と一緒に編み物をしたりなどしてね。ときに目が見えているはずの私が気づかないことを、粟津さんがまるで見えているような物言いをするものだから、それで笑いあったりして」

1984（昭和59）年夏、キヨは乳ガンの手術のため入院。1986（昭和61）年には次女が男児を出産し初孫を抱く喜びに恵まれたが、この頃には悪性

腫瘍が肝臓を蝕み始めていた。同年5月、辛く苦しい闘病生活の中、多くの協力者の力を借りて完成させた『光に向かって咲け—斎藤百合の生涯—』が刊行された。そして、1988（昭和63）年9月6日、キヨは肝臓がんのため生涯を遂げる。68歳だった。盲目というハンディを抱えながらも、自分より過酷な境遇にいる者のために捧げた人生であった。



皆に囲まれて祝福を受ける
（1986.7.5「光に向かって咲け」出版記念会）

「考える会」は同著の印税をもとに盲女子大学生に対し奨学金の給付活動をスタートさせる。キヨも生前2回ほど授与式に参加したというこの活動は、次第に寄付も集まり始め、その資金で賄われることになっていった。

2000（平成12）年を期に活動を終えた「考える会」でキヨの没後に中心として活動していた伊藤さんは想像を巡らせる。

「粟津さんが今の技術を見られたら、さぞ驚かれるでしょう」

確かに、カセットテープはDAISYに置き換わりつつあるし、点訳作業はパソコン点訳によって便利なものとなった。だが、そうした技術を用いて奉仕する多くの人たちの精神は、キヨの生きた時代と何ら変わりはない。そうした生き方、精神を体現した先達として粟津キヨの足跡を、本稿を通じて知っていただけたならば幸いである。

最後に。お忙しい中、取材のお願いに対して「粟津さんのことならば」と快諾してくださった伊藤泰子さんに深く感謝し、御礼申し上げます。

*<http://www.fumikonouni.com/>

<参考文献>

粟津キヨ『光に向かって咲け—斎藤百合の生涯—』（岩波書店、1986年）

竹村実「苦難に耐えひたむきに生きた 粟津キヨ」（『道ひとすじ——昭和を生きた盲人たち——』、27～32頁、あずさ書店、1993年）

熱く燃えて走り抜いた

あんどう よしひで
安藤 嘉英先生

阿佐 光也

2007年10月 No. 233 掲載

1.

今日も日本盲人キリスト教伝道協議会（盲伝）の狭い事務所で少々賑やかな音を立てながら点字プリンタTP32が働いている。かなり年季の入ったこの機械こそ、これから紹介する安藤嘉英先生の遺品である。一人娘の結婚費用にと申請して共済組合から資金を借りて購入したという逸話のある機械だ。今から十数年前のTP32は盲学校教諭のポケットマネーでは手の出ない代物だった。盲人用パソコン機器の出始めの頃から、先生は自宅にその一式をそろえて、仕事やボランティア活動に縦横に活用していた。夫人の史子さんは「自分でできることは万難を排して自分でやる人だから、毎晩随分遅くまでパソコンと向き合っていましたよ。私はコンピュータ未亡人でした」と思い出を語る。その由緒あるプリンタが今も盲伝の事務所で活躍している。



安藤先生は2000年5月5日に胃ガンで亡くなられた。61歳のときである。下関にある山口県立盲学校を定年退職する直前の1999年2月、定期健康診断で胃ガンが発見されたのだ。すぐに入院し手術、胃の3分の2を摘出したが再発、最期は下関安岡病院緩和ケア病棟で迎えられた。私はその病院の建つ日本海の手前へ連れて行っていただいた。先生の入院中、朝8時に来て夕食が済むまで毎日病室で先生に付き添われた史子さんは「夕方になると日本海に沈む夕日が窓から見えて、それはきれいでした。まるで太陽がジュッと音をたてて海に沈むようなんですよ」と語ってくれました。夫人も左眼だけ0.01の視力である。余程美しい夕日だったのだろう。私はその言葉を聞いて、安藤先生も日本海に落ちる夕日のように、熱く燃えたままジュッと音をたてて神様の許に帰られたに違いないと思い、胸が熱くなった。

2.

先生の経歴は1961年より1999年まで盲学校の理療科の教師である。このように県立盲学校の理療科を勤め上げたという人ならいくらでもいる。では何故、安藤先生がこのコーナーで取り上げられ、その執筆を私が依頼されたのか。それは一にも二にも先生の生きる姿勢とその足跡にあると私は思っている。「とにかく熱い人でした」と家族も少々呆れている先生の熱血人生。しかし、熱い先生の周りはいつも、暑苦しさは無く、爽やかな風が吹いていた。それが先生独特の魅力なのだ。それにしても61歳は早すぎる。盲学校退職こそ先生の様々な業績の始まりとなるはずであった。盲伝と先生との関係に限っても、先生は盲伝の機関誌である月刊点字雑誌『信仰』の主筆に就任することが決まっていた。もしそれが実現していれば、大いに健筆を揮われたであろう。また、いずれ盲伝の議長としてこの全国組織全体の責任を担ってくださったであろうことは関係者の誰もが疑わないことである。先生の退職後に活躍が期待された分野は、盲伝の他にもいろいろあったと聞いている。

私が安藤先生と初めてお目にかかったのは、私が盲伝の主事としての勤務を始めた1984年の夏、松江市で行なわれた全国集会であった。お互いに自己紹介をしたときの印象を今も忘れない。何とも心地好い魅力に圧倒されたのだ。その傍らで当時まだ女子大生だった一人娘の恵さんの微笑みが花を添えていた。その瞬間から、盲伝における仕事上での関係は勿論のこと、私は先生と個人的にも随分親しくお付き合いをいただいたのである。

3.

先生はクリスチャンである。クリスチャンになったときの経緯がまことに先生らしい。そのあたりから紹介したい。先生は1961年東京の理療科教員養成施設を卒業して、下関の盲学校に着任した。名古屋出身の先生にはまったく未知の土地での一人暮らし、学校関係者の温かい歓迎や親切は受けても、新人教師として、また初めての下宿での単身生活に不安を覚えたという。そこで、盲学校の向かいにある下関ルーテル教会に足を運んだ。先生は名古屋の盲学校でも、東京の教員養成施設でもバイブル・クラスに籍をおいていたから、キリスト教についての知識はあった。しかし、自ら教会に赴いたのはそのときが初めてであった。その日からこの教会の牧師、俵貢と安藤嘉英の1対1の白熱した対話が始まるのである。先生はそれまで抱いていたキリスト教の教義に対する疑問をぶつけ、牧師が真正面から

真剣に応える。牧師は現代の神学書はもちろん、ダーウィンの『種の起源』やオパーリンの『生命の起源』、あるいはケルケゴールやレッシングの著書も引っ張り出してきて熱っぽく語ったという。この牧師との対話を通して、「心の中でもやもやしていたものが、次第に透明度を増していくときの喜びは、えもいえないものがあつた」と先生は述懐している。この対話は8カ月間続いて、その年のクリスマスに俵牧師より洗礼を受け、先生の熱い心はイエス・キリストの愛に満たされたのである。

ここに先生の1つの特技が見られる。先生には会う人を真剣にさせるものがあるのだ。俵牧師もこの体験を後年「ねじり鉢巻きの真剣勝負だった」と語っている。1人の老牧師は突然に現れた1人の盲青年にそこまで動かされたのである。以来、先生は下関ルーテル教会の中心的存在として亡くなるまで教会に奉仕された。往々にして教会では盲人信徒はお客さんになりがちだが、先生は役員として、時に会計役員も引き受けられ、また、教会学校の校長となり、牧師不在のときには礼拝の説教までして教会を支えてこられた。更に先生は山口県盲人キリスト信徒会の設立に尽力され、後に会長として多くの信徒を導かれた。「安藤先生の灯された火を消してはならない」、これが先生亡き後の信徒会の合い言葉になっているという。また、盲伝の維持会員となり、中央委員、宣教研究委員、教育者部部长として全国的な奉仕を続けられたのである。

4.

出会う人を真剣にさせる人格とキリスト教によって培われる愛の精神の配合は教師として最高の資質であろう。先生は理療科の教員としての研鑽を積み、その教育に全力投球されたことは勿論だが、更に視覚障害者の意識向上や社会自立などのために力をつくした。その教育の一環として、全国盲学生弁論大会に向けての指導を熱心に行ない、優勝、準優勝などに導いた。また、1人1人の生徒に対していつもしつこいほどに丁寧な指導を行ない、悩み、躓く者があれば家庭に呼んでもてなし、心を通わせ、励ました。国家試験合格のために、力量が足りない者には、学校での補習による実技指導はもとより、しばしば自宅に招いての実技指導を行なった。史子さんはそのときのことを次のように語っている。「とにかくいつも生徒さんが来てましたね。男の子には補習や実技指導をしたり、進路の相談や、卒業生のお見合いも随分しました。女の子は私も弱視ですので、編み物や料理なんかを一緒にやりました。生活実習教室みたいでした。特に、週末

は混雑して、日曜には課題を出して、私たちは教会に行っていました。その人たちの何人かが山口県盲人キリスト信徒会の主要なメンバーになってます」

先生は誰をも放っておけず、常に体当たりであった。伸びる子の才能を引き出す一方、万引きをして捕まった子の味方になって、最後まで付き合って更正させる、そんな一面もあった。この教育者としての働きに対して、1996年山口県教育委員会から教育功労賞を授けられた。本業の理療科の腕前に関しては、こんな逸話がある。家で飼っていた愛犬のムクが倒れて動けなくなった。獣医は「年齢からきた脳梗塞だから手の施しようがない」とサジを投げた。先生は治らないはずはないと、毎日ムクに鍼治療をして、マッサージを続けた。そして、ムクは元気を取り戻した。このムクが先生亡き後、史子夫人を1年余りにわたって慰め助けたのである。

5.

では、先生はどのような環境に育ったのか。少し歴史を遡ってみたい。安藤先生は1939年2月19日愛知県名古屋市に生まれた。三男三女の次男で、父と兄は弱視、弟は全盲で聴覚障害と知的障害を併せ持つ。家業は鍼灸院であった。先生自身は小学校入学前に失明した。戦後の栄養不良が原因である。この実家に関して、「平凡な家庭ですよ」と夫人は話す。先生の熱血は突然変異なのか。そんな中、先生は小学部から専攻科まで愛知県立名古屋盲学校で、家族から離れて寮生活を送った。学生時代は、男声合唱団のリーダーとしてコンクールで全国優勝したり、フルートを演奏したり、生徒会長なども務めた。また、暗算、珠算が得意で、全国盲学校対抗珠算・暗算大会を駆けめぐって常に優秀な成績をおさめた。更に点字書の読書にも相当励んでいたようだ。「物怖じせず、積極的で、しかも人望があつかった」と当時を知る人は語っている。

名古屋盲学校から東京教育大学附属盲学校理療課教員養成コースに挑戦したのも先生のチャレンジ精神の現れといえる。チャレンジ精神といえば、盲導犬を求めてアメリカまで出掛けて行ったこともあった。1970年のことである。仲間2人と夏休みにロスアンジェルス盲導犬訓練所に合宿して、犬と歩く訓練を受け、盲導犬ハリーと共に帰国した。その頃日本の盲導犬は30頭にもなっておらず、ハリーは岡山以西では初めての盲導犬だった。しかし、当時はすべての交通機関で犬は乗車拒否をされていた。先生は盲導犬を交通機関が受け入れてくれるように随分運動をされたが、法律の壁は厚かったようだ。

6.

精力的な活動を続ける一方で、先生には健康面の不安がいつもあった。恵さんは、父親を称して「病気のデパート」と話したことがある。糖尿病、高血圧、胆石、リウマチ、そして難聴、これらは多分に生来の体質によるもので、まことに残念である。特に晩年の難聴は先生を苦しめた。合唱を愛し、フルートを奏で、音楽鑑賞を楽しんできた先生が聴力を失う無念さは計り知れない。先生もその悔しさを語っている。しかし、先生はこのマイナスをプラスに転じさせた。盲ろう者の孤独の深淵を体感し、この分野の福祉が立ち後れていることを知り、山口県に「山口盲ろう者友の会」を立ち上げるべく奔走するのだ。そして、1998年10月にその発足をみて、初代会長となったのである。設立の式典には福島智氏が記念講演をされた。

この働きこそ先生の熱さの真骨頂である。先生と二人三脚で「友の会」を立ち上げ、現在事務局長をしている手話と点訳のボランティア森川久美子さんにお話を聞いた。「安藤先生は私の点字の先生なんです。先生の前に立つと、悪いことできない、そんな気持ちになる。不思議でしょう。とにかく先生の魅力の虜になって、それで先生と一緒に、友の会を作ろうと準備を始めたのです。当事者や支援者、また関連行政機関などの間をまわって、本当に大変だったけど、先生と一緒にだったからあれほど早く立ち上げられたと思います。安藤先生に会っていただくと、誰でも先生が好きになって協力してくれるんです。不思議な魅力ですね。私は先生の話をするとき『とにかく一度会って下さい』と言うのです。それしか説明のしようがないのです」

7.

安藤先生の熱い人となりを私の思い出と関係の方の証言によって綴ってきた。まだまだ逸話はある。しかし、私はここで読者の皆様に直接安藤先生に会っていただきたいと思う。ここに先生自らがご自分の生き方を記した名文がある。日本点字図書館1995年度「随筆・随想コンクール最優秀作」となった『もっと沖へ』という一文である。私は壁にぶつかったとき、あるいは心が落ち込んだとき先生のこの文章を読むことにしている。必ず力が湧いてくるからだ。最後にこの先生の肉声を聞いていただいて私の責任を終わりたい。目立つ業績ではなく、目立たないところで、人を励まし、力づけ、希望を与え続けて若くして天に旅立たれた先生の熱くも爽やかな人生に感謝しつつ。

『もっと沖へ』

安藤嘉英

中学3年のとき、先輩に薦められて、私は初めてヘンミングウェイの「老人と海」を読んだ。幸いなことには、そのとき学校の図書室に、点訳本が見つかったのである。

舞台はキューバの首都ハバナの港。1人の老人が毎朝、小船を操って漁に出掛けて行く。なぜか84日間も不漁が続き、1匹の魚もとれなかった。しかし、老人は幾日不漁が続いても、けっして失望しない。今日こそは、今日こそはと、毎日新たな希望を抱いて、手こぎ船で大海に乗り出して行く。

85日目も同じように出掛けて行くのだが、これまでと少し違ったことは、いつもより沖へ出てみようということだった。そして、ついに、とてつもなく大きな魚が、彼の釣り針にかかった。丸2日間の格闘の末、大魚はその姿を海面に現わした。なんと、それは自分の操っている5メートルほどの小船よりさらに大きなものだった。とうてい船には乗らないので、やむなく舷側に縛り付け、意気揚々とハバナの港に向かう。ところが、帰る途中、4度にわたるサメの襲撃に遭い、肉の部分は根こそぎ食いちぎられてしまう。あとは頭と背骨としっぽだけを残すばかりの、見るもむざんな姿と化した大魚をいたわるようにして、老人はだれもない真夜中の港に帰って来る。けっきょくは、今回も敗北であったが、老人はへこたれない。「少し遠出をしすぎただけさ」と自分に言い聞かせながら、あえぎあえぎ丘を登り、自分の丸太小屋に帰って深い眠りにつく。

最後まで読んで、急に涙があふれ出した。人間の一生とは、こんな寂しいものなのかと思った。

2回目を読んだのは、高校3年のときであった。受験勉強のさなかであったが、一息つきたいと思い、もう一度読み返した。今度は泣かなかった。いったい、この大魚とは、自分の人生で言えば何だろうか。どんなに打ちのめされても失望しないこの老人の生き方は、どこから来るのだろうかと思案に考えた。そして、この小説をいつか原文の英語で読んでみたいと思うようになった。

下関盲学校に就職してちょうど10年たったとき、盲導犬の訓練で渡米する機会が与えられた。このとき、「老人と海」の英語版をぜひ手に入れようと、幾つかの点字出版所に問い合わせたが、願いは叶わなかった。

そして、さらに5年ほどたって、ある点訳ボランティアから「何か点訳

してほしい本はないか」と言われ、無理だとは思いながらも、「老人と海」(The Old Man and the Sea)の点訳がしてほしい旨を話した。すると、自分の主人は高校の英語の教員をしているから、何かと手伝ってもらえようからといって、早速点字英語の略字、縮字も覚え、この難事業に取り組んでくださった。

半年後、その点訳本が送り届けられたときの感動を、今でもはっきり覚えていいる。英語がそれほど出来たわけでもないのに、辞書と首っぴきで少しずつ読み進んでいった。ちょうどそのころ、タイミングよくNHKの「古典を読む」で「老人と海」がとりあげられ、これも熱心に聴いた。丸2日間戦って、大魚を仕留めるクライマックスも、原文ならではの迫力に圧倒されながら、胸を高鳴らせて読んだ。あいつぐサメの襲撃に肉を食い取られていくあの悲劇の場面も壮烈に迫ってきた。

こうした幾つかのシーンから受ける感動もさることながら、私をこの小説の虜にしてしまったのは、<far out>という言葉との出会いであった。85日目に「今日はもっと沖へ出てみよう」という「沖」という言葉は、英語では<far out>という表現で書かれていた。日本語訳ではそれが感じ取れないのだが、原文には何度も何度も<far out>が繰り返し出てくるのである。この小説の底を流れているテーマはこれだと思った。

それ以後、この<far out>が私の人生を力強く引っ張ってくれることになった。八方ふさがりで途方に暮れたとき、「もっと沖へ」というこの言葉がキーワードとなって、思いがけない解決策が与えられた。

そして<far out>がさらに深みを増したのは、新約聖書の中のルカによる福音書第5章の記事と、この小説との類似性に気づいたことである。漁師のペトロたちが夜通し漁をしても何も取れず、船から上がって網を洗っていると、イエスが近づいて「沖に漕ぎ出して網を降ろせ」と言われる。素人に何が分かるかと思いながらも、その言葉に従うと、船が沈みそうになるほどの大漁になったというのである。英語の聖書を開いてみると、やはりここにも<far out>という言葉が躍っていた。

下関は漁港の町である。この町にも、こんな老人がいるような気がしてならない。

にってんフォーラム18(1996年冬号)より

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みにになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

著者一覧

(敬称略・50音順)

あ さ	ひろし	阿佐 博	日本点字委員会顧問
あ さ	みつや	阿佐 光也	元日本盲人キリスト教伝道協議会主事
いまこま	やすなり	今駒 泰成	元日本盲人キリスト教伝道協議会主事
いわかみ	よしのり	岩上 義則	社会福祉法人日本点字図書館館長
うめ お	あけ み	梅尾 朱美	
おおやぶ ま ち こ		大數眞知子	点字指導・シンガー
かがわ	くにお	香川 邦生	健康科学大学教授
かとう	としかず	加藤 俊和	社会福祉法人京都ライトハウス 情報ステーション所長
かなもり		金森 なを	元名古屋盲学校教頭
きづ か	やすひろ	木塚 泰弘	社会福祉法人日本ライトハウス理事長
こしみず	たつはる	輿水 辰春	社会福祉法人視覚障害者支援総合センター職員
こばやし	かずひろ	小林 一弘	日本点字委員会副会長・全国盲学校退職校長会会長
さ さ き	みのる	佐々木 実	三療業
しらはた	いさお	白畠 庸	日本東洋医学系物理療法学会会長
しん	よんほん	愼 英弘	四天王寺大学大学院人文社会学研究科教授
たかはし	さとる	高橋 智	東京学芸大学総合教育科学系教授・博士（教育学）
たかはし	ひではる	高橋 秀治	社会福祉法人ぶどうの木 ロゴス点字図書館館長
たけだ	きょうこ	竹田 恭子	視覚障害者文化を育てる会（4しょく会）代表
とうやま	ひらく	当山 啓	社会福祉法人日本点字図書館
なが お	えいいち	長尾 榮一	元筑波大学教授・医学博士
ながおか	ひでじ	長岡 英司	筑波技術大学教授
にお か	よしひろ	新阜 義弘	千山荘 主任生活相談員

のりさわ 法澤	ともりの 奉典	社会福祉法人愛光理事長
ふじの 藤野	たかあき 高明	元全日本視覚障害者協議会会長
ますだ 増田	もりお 守男	元兵庫県立盲学校同窓会会長
まつうら 松浦	みき 実希	元社会福祉法人視覚障害者支援総合センター職員
みずたに 水谷	まさふみ 昌史	
むとう 武藤	かおり 歌織	N P O 法人バリアフリー資料リソースセンター事務局
やまぐち 山口	のりこ 規子	社会福祉法人関西盲人ホーム
よしざわ 吉澤	まさえ 昌江	筑波大学附属視覚特別支援学校音楽科教諭

先達に学び業績を知る

～視覚障害先覚者の足跡～

実費頒価 1,500円（税別）

2009（平成21）年8月1日 初版発行

監 修 高橋 實

発行所 社会福祉法人視覚障害者支援総合センター

〒167-0043 東京都杉並区上荻2丁目37番10号Keiビル

TEL 03-5310-5051

FAX 03-5310-5053

<http://www.siencenter.or.jp/>

mail@siencenter.or.jp

郵便振替口座 00110-4-576094

印刷・製本 タナカ印刷株式会社

〒104-0031 東京都中央区京橋3丁目12番4号

TEL 03-3567-2551 FAX 03-3564-2920

視覚障害者支援総合センターとは

若い視覚障害者で羽ばたこうとしている人や、社会に巣立ち躍進を目指している人を支えていくことができればという願いから1987年に開設しました。

主な事業

1. 視覚障害者に対する各種情報提供支援（社会人・学生対象）
 - ・一般図書・雑誌、参考書、実用書等の点字図書の製版や出版
 - ・月刊『視覚障害——その研究と情報』の編集・発行
2. 視覚障害学生に対する学習支援（学術書等の点字化や朗読、みずほ・メイスン・聖明・朝日奨学生の公募・推薦・運営）
3. 視覚障害者の職域拡大・社会参加促進への取り組み
 - ・視覚障害者授産施設チャレンジの運営
 - ・国家公務員など資格試験の各種問題集、学術専門書の点字出版
 - ・視覚障害音楽家の社会参加促進、コンサート開催など
4. 若い視覚障害男女を奨励（2003年創設）
 - ・「チャレンジ賞」「サフラン賞」制度の運営
5. ボランティアの養成と組織化
 - ・点訳者養成講座の開催と点字通信教育の実施
6. 活字出版および社会啓発・広報活動の実施
7. 視覚障害に関わる職業・教育・福祉・文化の調査研究
8. 点訳・音訳等の受託
 - ・点字教科書製作、点字名刺、自治体等の各種広報誌の点字版・音声版の製作など

当センターでは、事業運営を支えるために皆様のご協力、ご支援を広くお願いしております。

1. 視覚障害者を支援していくための寄付を募っています。頂いたご寄付は当センターが取り組んでいる様々な支援活動に活用させていただきます。
2. 使用済み切手・書き損じ官製ハガキ・不要になった音楽CDのご提供
3. 読み合わせボランティアの募集
4. 視覚障害者支援総合センターを支える会の会員募集
 - ・支える会は、センターが行う事業及び視覚障害者の福祉向上のための活動助成を行うものです。会費は1口5千円となっています。会員の方には、機関誌「支援センターだより」をお送りしています。

視 覚 障 害

— その 研 究 と 情 報 —

墨字・点字・DAISY・テープ（普通速・半減速）・
フロッピー（点字データ）・Eメール（点字データ）
6 媒体出版の月刊誌 同一内容 同価格

1963年 4 月創刊。

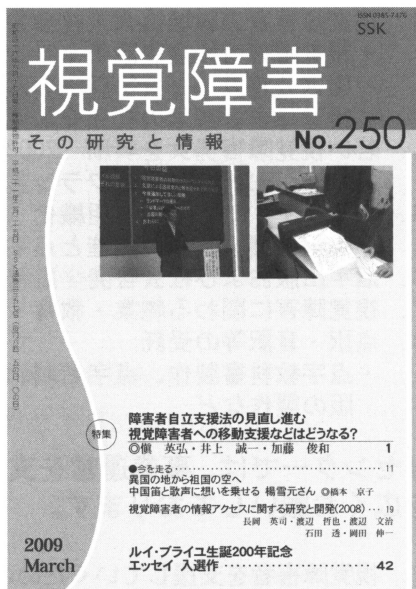
視覚障害に関わる職業・教育・福祉・文化、行政の取り組みや関係法制度、点字に関する研究・考察、国際情勢、IT情報、施設や盲学校のユニークな活動、活躍する人などに関する特集記事や対談・研究・ルポ等、最新の話題が満載！



先達に学び業績を知る

好評連載中！

年12回 毎月 1 日発行
購読料 6,000円（年間）
（テープ普通速のみ7,200円）



＜お申し込み・お問い合わせ＞

社会福祉法人視覚障害者支援総合センター

〒167-0043 東京都杉並区上荻2-37-10 Keiビル

Tel 03-5310-5051 Fax 03-5310-5053

mail@siencenter.or.jp http://www.siocenter.or.jp/

ホームページでは「編集後記」を公開中！



本書は
平成21年度
日本郵便の
年賀寄附金の助成を
受けて製作しました。